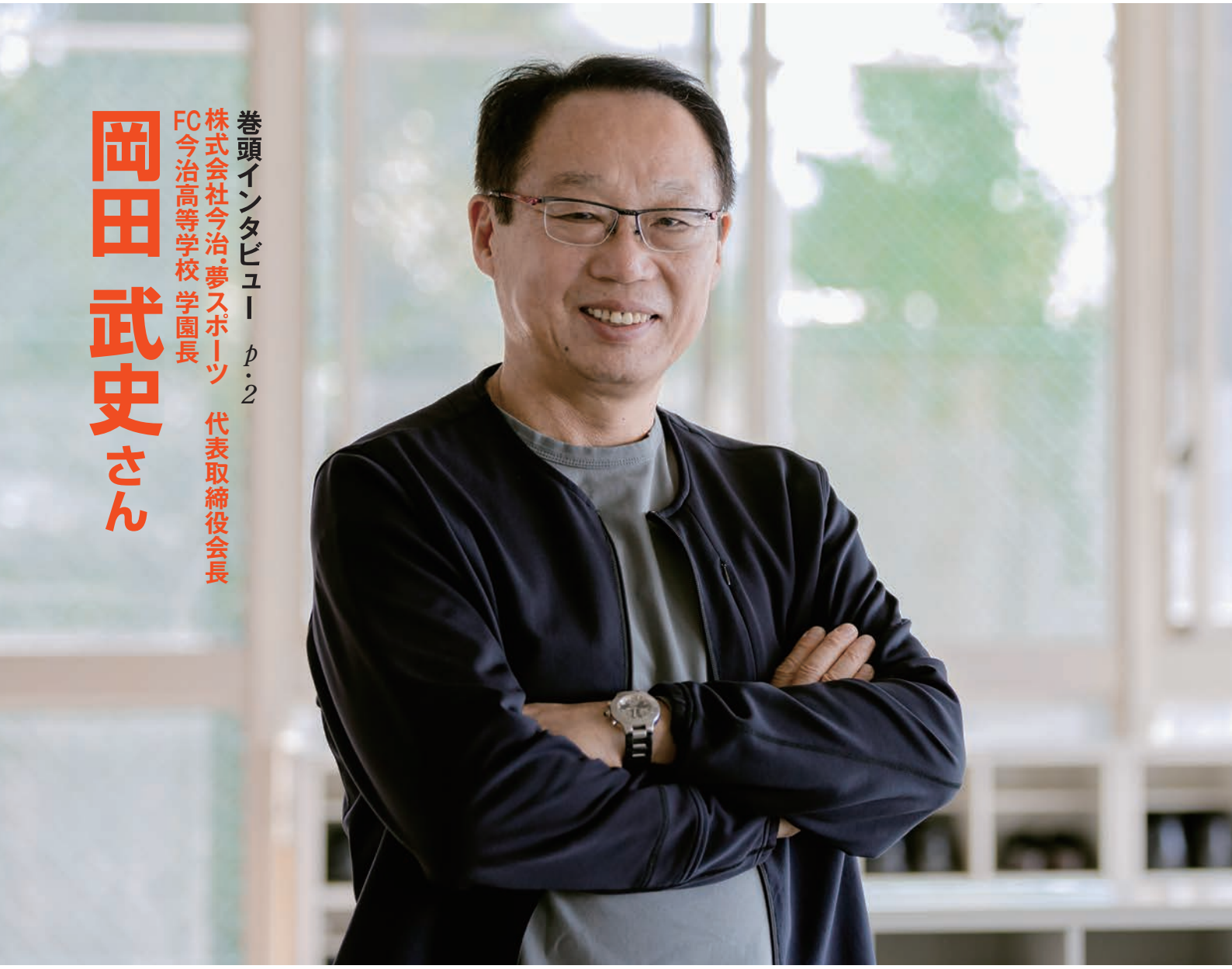
教育出版

Educo エデュコ

学びのチカラで 人と社会を 未来へつなぐ

No.63
2024年



巻頭インタビュー p.2

株式会社今治・夢スポーツ 代表取締役会長
FC今治高等学校 学園長

岡田 武史さん

知っておきたい教育 NOW p.4
① デザイン教育の意義と可能性
② 表現者となったいま思う、感性を養う授業とは
③ 集団生活への適応・社会的自立を目ざした支援のためのサポート・プログラム
④ 学校が生徒の居場所となることを目ざして

きょういく見聞録 p.12
手書き文字文化の現在、そして未来のために

地球となかよしトピックス p.14
地域教材を見直し、子どもが社会に貢献する意欲を育む教育活動

Information 北から南から p.16

地球となかよしゼミナール p.18
【連載第１回】
「話す」は生きる力
～子どもたちの未来を変えるプログラム～

Front Runner p.19
【連載第２回】
私たちの未来のために！　多彩なSDGsアクション
～こどもエコクラブ～

ほっとな出会い p.20
福聚山　慈眼寺　住職　塩沼 亮潤さん

次世代の人材教育を愛媛県今治でキックオフ――いま求められる新時代のリーダーとは

株式会社今治.夢スポーツ　代表取締役会長
FC今治高等学校 学園長
岡田 武史さん

親が不在がちだった少年時代

子どものころはちょっとやんちゃで、学級委員や生徒会長も一応やっていたのですが、いつも先生に叱られて立たされていました。産婦人科医の父は多忙でほとんど家におらず、母は物心ついた時から体が弱くて入院ばかりしていたから、わりと自分勝手に生きていましたね。遠足の日も大きなお握りひとつ作って持っていったりして、自分のことは何でも自分でやりました。おかげで自立心だけは養われたかもしれないですね。

サッカーとの出会いは中学生の時です。小学校では野球や陸上をしていたので、野球部の見学に行ってみたら柄の悪い先輩がバットで後輩を殴っていて、こんなところに入ったら大変なことになると思った。グラウンドを見るとちょうどサッカー部が練習していて、ぶつかって転ぶとそこからプロレスが始まって、見ていてすごく楽しそうだった。それでサッカー部を選んだんですよ。

手でやる競技はすぐうまくなるけれど、サッカーは足でやるからなかなかうまくならない。それでも今日2回ボールリフティングできたのが翌日は3回できるというように、努力すれば少しずつ進歩していくのがわかると、もう好きでやめられなくなりました。一緒に入部した友だちはすぐやめていきましたが、僕は一日中ボールを蹴って、本当にサッカーに明け暮れましたね。

不遇の時代を乗り越えて

高三の時に日本ユース代表に選ばれて、合宿所から入試を受けに行きました。五木寛之先生の『青春の門』に憧れて、主人公と同じ早稲田大学に入りたかったのです。一浪して無事合格しましたが、浪人中に10kg以上太ってしまい、もうサッカー部に入るつもりはありませんでした。しかし、日本サッカー協会の専務理事に「何のためにユース代表に選んだと思ってるんだ」と言われて、翌日入部しました。全員が倒れるまで追い込むような激しい練習で、もうやってられるかと思っていたのですが、レギュラーになったら心地よくてそのまま続けました。

大学卒業後は古河電工に入社したのですが、僕らサッカー部は午前中に仕事をして、午後から練習をするので残業ができず、食べていくのが精一杯ですよ。妻も働いてくれていたけれど、六畳一間のアパートには風呂もなくて。二人で銭湯に行っては、いつか風呂のある家に住みたいねと言っていました。会社の50円のカップコーヒーすら買う余裕がなく、日本代表に選ばれるとサラ金でお金を借りて参加していたくらいです。

現役引退後、ドイツに一年間コーチ留学した時も、前任者も誰もいない場所で住む家もなく、必死の思いで何とか生活していました。そういう経験があまりにも多すぎて、もう挫折を挫折とも感じなくなりましたね。

遺伝子にスイッチを入れる

転機になったのは1997年、それまで日本代表のコーチをしていたのが、いきなり監督に指名されたことですね。監督としての初仕事がその国の代表監督なんて、世界広しといえども僕くらいだと思う。

日本代表はW杯初出場をかけて正念場を迎えていました。当時は電話帳に番号を載せていたのですが、脅迫状や脅迫電話が止まらなくて。パトカーが家の前を24時間守って、妻は毎日子どもを学校に送り迎えして、とんでもない状況で戦っていました。

PROFILE
1956年大阪府生まれ。早稲田大学政治経済学部卒業後、古河電気工業サッカー部（現ジェフユナイテッド市原・千葉）に入団し、日本代表に選出。1990年に現役引退後、日本代表コーチなどを経て、1997年に日本代表監督に就任。W杯フランス大会に出場。2007年に2度目の日本代表監督に就任し、W杯南アフリカ大会ではベスト16に導いた。2014年、FC今治のオーナーに就任。2019年には日本サッカー殿堂入りを果たした。2024年4月開校のFC今治高等学校学園長に就任。著書に『岡田メソッド―自立する選手、自律する組織を作る16歳までのサッカー指導体系』など。

イランとの決戦を控えた前日、妻に国際電話して、明日もし勝てなかったら俺は日本に帰れないと言いました。でもその数時間後に、「明日急に名将にはなれない。命がけでやるけどそれで駄目だったらしょうがない、国民の皆さんに謝ろう。悪いのは俺を選んだ会長だ」と完全に開き直って、怖いものがなくなったんです。結果、日本は延長戦でイランに勝利し、W杯本選初出場を決めることができました。

生物学者の村上和雄先生が言うには、人間は氷河期や飢餓期を越えてきたご先祖様の強い遺伝子をみなもっているけれど、安全な環境下ではスイッチが入らないそうです。僕はあの瞬間、遺伝子にスイッチが入ったような感覚になって、そこから人生が変わり始めたんですね。あれが自分にとってものすごく大きなターニングポイントになった気がします。

教育界に乗り出した理由

遺伝子にスイッチを入れる経験をして、改めて我々が作ってきた社会を見れば、便利で安全快適な暮らしが広がっていて、ひとつの公園で怪我人が出れば全部の遊具が使えなくなる。こんなに守られて、一体いつ遺伝子にスイッチを入れるんだと思いま

した。

コンビニの前にたむろして「ダルい」「ウザい」とぼやいている若者たちが悪いんじゃない。何もせずとも生きていける社会を作ってしまったことが問題なんじゃないか。

そう思った僕は一般社団法人ＯＩＪを立ち上げて、野外体験教育を始めたんですよ。第一回は早稲田大学の学生を10人、カナダのエドモントンに連れて行きました。アルバータ大学の学生と二人一組になって五日間カヌーで川下りし、その後五日間ロッキーハイクするという過酷なプログラム。遺伝子にスイッチを入れる経験をさせるため、かなりハードなことをさせました。インストラクターはいますが、どこでビバークするかとか遅れた分をどうするかなどは学生同士で解決させる。言葉が通じない、帰ると泣き出す者もいて、カオスになるんですよ。遅れつつ何とか全員戻ってきた時はみんな抱き合って涙して、目が変わるんですよね。

それが教育に乗り出した最初のきっかけです。環境教育にも興味があって、作家の倉本聰さんが主宰する富良野自然塾のインストラクターもしていました。ただ自分では学校教育に踏み出すとは思っていなかった。これはもう別物だと考えていましたから。

我々「ＦＣ今治」は、この地で新しいコミュニティを作ろうとしているんです。最終的にやりたいのは物の豊かさより心の豊かさを大切にする社会、共助のコミュニティを作ること。そのコミュニティを作るのに教育はどうしても欠かせないと思案していた時、創設１１７年の歴史をもつ学校法人明徳学園が、運営に参画してくれないかと打診してきたのです。僕は人寄せパンダになるつもりはなく、やるなら本気で新しい教育を始めたかった。そこで２年間熟考したうえで、学園長として就任することに決めました。

現在の今治明徳高校は今年４月から「ＦＣ今治高校」に名称を変え、現在の本校は「明徳校」に、矢田分校は「里山校」へと新しく生まれ変わります。一斉授業はできるだけなくしていく方針で、午前は選択制の座学の授業、午後は校外での実習やゼミ中心のカリキュラムを用意し、都市全体がキャンパスというイメージで実践的な学びに力を入れます。

田んぼや畑作りもしますし、フードバンク設立や町中の空き家を再利用する取組も主導し、仮想通貨での支払いなどもリサーチして。衣食住を保障しあう共助のコミュニティを生徒主体で作っていくのです。

まずはやってみること

僕が若い時は生きていくだけで山や谷がありました。それで小さな遺伝子にスイッチを入れるチャンスがあったけど、今はそれがない。今の人は自分で山を作らなきゃいけなくて、それが夢や目標なんですね。「夢も目標もない場合はどうしたらいいですか」とよく若い人に聞かれるのですが、「今月中にカラオケで２曲マスターする」でも何でもいいから、ともかくやってみろと言います。そうすると、「このカラオケの機械はこうした方が売れるんじゃないか」とか、「この曲はここにギターを入れた方がいい」とか、次が見えるんですよ。

僕は曹洞宗で座禅をするのですが、永平寺に禅師さんが謁見する部屋があって、「淵黙雷声（えんもらいせい）」と書かれた掛軸がかけてあるんです。禅師さんに聞いてみると、「悟る方法を弟子に聞かれたお釈迦様が深く沈黙した。その沈黙が雷の声より大きかった」という意味だそうで、「悟りがどうこう言うなら修行して一歩でも踏み出しなさい」と説いているのです。

若いうちから大それた夢や目標なんてできないですよ。能書き垂れてるんじゃなくて、何でもいいからともかく一歩踏み出してやってみなさい、そうすると見えなかった道が見えてくる。若い人にはいつもそう言ってますね。

ロールモデルのない時代のリーダー

長年、国内外の多くの選手を見てきた経験から、日本の選手には主体性が乏しいと感じます。海外の選手は自分で考えて行動するので、苦しい試合展開の最中も選手同士大声で意見をぶつけあい、逆転勝利する姿を見てきました。対して日本の選手は「どうプレーしたらいいですか」と監督に聞いてくる。

主体性を育むためには、教えるより引き出すイメージがふさわしいと思います。僕はよく、人を育てるなんておこがましい、本人が育とうとするのを邪魔するなってコーチに言うんです。

今の先生がたは責任を負いすぎですよ。「自分がこの子を育てなきゃ、導かなきゃ」なんて無理に決まっています。その子はその子自身で育つんですよ。

今春始まるＦＣ今治高校では、生徒の主体性を尊重し、教師は一緒に答えを探すサポートをしていきます。今までの教育では、教師は自分の知っていることを一方的に教えていればよかったけれど、個別最適な授業では生徒はいろんな質問をしてきます。そのとき、全部に答えねばなんて気負う必要はない。「それは先生もわからんから一緒に調べよう」と言えばいいのです。自分を繕わなくてよくなったら、どれだけ楽か。そこを、教師たる者かくあらねばならぬとか、自分は何でも知っていなければなんて考えると、苦しくなるばかりですよね。

僕はややこしい選手を扱うのが得意だとサッカー界で言われてきたのですが、扱うんじゃない。いかに自分をさらけ出し、腹をくくれるかどうかなんですよ。

みんなが同じように成長する時代は「俺についてこい」と引っ張るリーダーシップが求められましたが、これからは多様な人々と対話をしながら、周囲を巻き込んでコミュニティを作る人材が必要とされます。

環境問題に40年以上携わってきて、地球温暖化はすでに閾値（いきち）を超えた感覚があります。もう元の世界には戻れない。これからはロールモデルがいない時代に突入します。情報が錯綜し、ChatGPT も登場して、何が本当かもわからない。過去のデータがどうとか、今まではこうだったなんて言っても、過去の事例に学べない時代が来る可能性があるのです。

そういう時代を生きていくには、あれこれ考えて準備してもわからないから、もうやってみるしかない。我々は「エラーアンドラーン」と呼んでます。トライアンドエラーではなく、勇気を出してやってみる。やって、失敗して、走りながら学ぶんですよ。

ここ今治の地で新しいリーダーを育成して、世界に送り出していきたいですね。ＦＣ今治高校ではエポックメーカーを作るキャプテンシップゼミも用意しています。若い人たちはぜひ一歩踏み出して、僕たちとともに世界を変える試みにチャレンジしてほしいです。

steAm 教育を考える

デザイン教育の意義と可能性

株式会社 GK グラフィックス
代表取締役社長　木村 雅彦

ポイント

①近年のデザインは、旧来の枠をこえてさまざまな人と協力し、ものごとの本質を見極め、共に未来を構想する行為に変わりつつある。
②それは企業や自治体において活用されるものにとどまらず、一人ひとりが身につけて、主体的に未来を拓くために、これから必要となる術である。
③したがって、美術教育の延長ではなく、すべての教科を貫く総合的な取り組みとしてのデザイン教育が必要ではないだろうか。

デザインという言葉が、一般的に用いられるようになって久しい。20世紀においてデザインは、主に色や形の意匠や、そのための計画を指すものだった。これに対して現在では、ものごとの仕組みや、人々の体験や意識にまでデザインの対象が拡大している。

また、子どもたちへのデザイン教育について調べてみると、義務教育の現場でも、色や形だけではない、新しいデザイン教育が求められはじめている、という記事が見受けられた。美術教育の延長だけではなく、すべての教科を貫く総合的な取り組みとしてのデザイン教育が、子どもたちが自分自身の未来を計画し、実行していくために必要ではないだろうか。

本稿では、子どもたちへの教育に携わる皆さんへの参考になればと思い、近年のデザインの変化と私たちの取り組みについて紹介してみたい。

社会人へのデザイン教育

デザインの基本的なプロセスは、課題を発見し、未来への仮説を生成し、仕組みを作り、具体化することにある。現在、デザインの概念や対象の拡大にともなって、課題発見から仕組み作りまでの上流領域について特化した専門分化が進んでいる。その結果、上流領域と具体化の段階との間に分離（分業化）が生じてしまっていることに、大きな課題を感じている。デザインを利用する生活者にとっては、ものごとの仕組みと具体化された製品は等価であり、とりわけ企業など組織の信頼づくり（ブランディング）という視点においては、高い精度での一貫性が求められるからである。

私たちはこの問題に対して、デザイナー一人がすべてを行うのではなく、さまざまな知見と視点をもつ人たちとの協創を通じてプロセス全体を一貫させることで、強く確実なデザインを実践することができると考えている。そのためには、すべての関係者が、デザインの基本的な考え方を共有している必要がある。そこでこの十年ほど、企業や自治体などでの関係者へのデザイン教育を実践し、さまざまな成功事例を通してその有効性に確信を持ちはじめているところである。

事例 丸ノ内ホテルへの総合的なデザイン支援

丸ノ内ホテルは、東京駅前に位置する開業百年の老舗ホテルである。圧倒的な利便性とサービスの質の高さから、欧米のビジネスパーソンを中心に多くの利用者に愛されている。しかし競合ホテルとの差別化や、時代に合わせたしつらえの更新など、これからを見すえた経営戦略と実践が必要となっていた。そこで2016年より私たちは、その活動をデザインによって支援するために、サイン（館内外の表示類）の見直しを中心とした取り組みに参画することになった。

調査とコンセプトの策定

取り組みの最初に、現状の課題を発見するための調査を行い、すべての部署へのヒアリング、試泊体験やタッチポイントの観察を通して問題点を抽出した。その結果、「スタッフにとって、自社の歴史が実感できない」という課題が浮かび上がってきた。

この問題を解決するために、丸ノ内ホテルの百年の歴史に裏打ちされた強みや特性を見出すことが必要だと考えた。そこで、残されていた過去の資料から、ホテルのスタッフと共に年表を作成し、ホテルの現在や今後に結びつく事象を探した。その中で私たちが着目したのは、1960年代に起用されたアメリカ人のインテリアデザイナー、パトリシア・ケラー氏の実績だった。それまでの日本で来日客向けのホテルのしつらえといえば、着物や甲冑、刀といった、日本を直接的にアピールするものばかりだったが、ケラー氏は抽象化された「日本らしさ」を提案し、新たなホテルのスタイルを実現していた。

私たちはケラー氏の思想を引き継ぎながら、ホテルのサービスやしつらえに展開できる普遍的な「日本らしさ」を探った。日本の基本的な迎賓の作法には、季節の変化を先取りして共有するという、茶道からつながる考え方がある。旅館などではよく見られるものだが、ホテルでもそれを取り入れたデザインを提案することとした。

上：サイン　下：アメニティ

具体的なデザイン展開

具体的には、ホテル館内の主要なサインの一部にアートピースを組み込み、季節ごとに差し替えることで、デザインコンセプトである日本的な迎賓の文化を感じさせる場とした。これには、いくつかのねらいがある。ひとつは、リピーターの多いホテルであるため、来訪するたびにしつらえが変わっていることで、丁寧に迎えられていると感じられること。そしてスタッフにとっては、季節ごとの更新を自ら行うことで、その行為を通してホテルの歴史とのつながりを実感し、誇りを醸成することである。

季節によるデザインの更新はサインにとどまらず、館内のさまざまなアイテムに展開した。例えばキーカードのケースや便箋など客室内のアメニティである。そしてこれらを更新する作業は、ホテルのスタッフが自主的に行っている。

客室の便箋をデザインした時に、印象深かったエピソードがある。ハウスキーピングの現場は一分一秒を争うと聞いていたので、私たちは四季に合わせた差し替えは困難と判断し、春夏秋冬のセットを提案した。しかし、現場の責任者は「それはコンセプトと違いますよね。これは私たちが行うべきことです」と強い意志をもって引き受けてくださった。このように、すべてのスタッフがこのプロジェクトの意義を深く理解しているからこそ、実現できたデザインだった。

協創と教育によるデザイン

丸ノ内ホテルの場合を含め、私たちはデザインプロジェクトのスタートとともに、デザインの基礎から応用までを紹介する勉強会をはじめることにしている。すべての関係者にデザインの意味やプロセスを理解いただき、基本的な「デザイン・リテラシー」の共有を図るためだ。これによって、その後の議論の精度や進行の効率を確実に上げることができる。

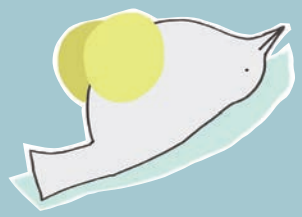
こうしたデザイン・リテラシーの共有と、協創によるデザインプロセスを組み合わせることによって、デザイナーだけでは見出せなかった課題や、外から見えにくい内部の状況を把握することができ、サービスやブランド、経営戦略におけるデザインの活用が行いやすくなる。

とりわけ未来予測が難しい時代においては、多くの視点から可能性を探り、検証を行う協創プロセスは効果的だ。私たちはこのように「協創」と「教育」を取り入れることで、デザインを継続して自律的に運用できる風土が、組織や地域に根付くと考えている。実はこれこそが、私たちデザイナーが今後提供していくべき、最大の価値ではないだろうか。

このようにデザインは、今やデザイナーだけで行うものではなくなり、すべての人々が智恵を結集し、共に未来を構想するための手段に変わりつつある。だからこそ義務教育においても、子どもたちが自らの未来を築くための一助として、今日的なデザイン教育が実現されることを願っている。

steAm 教育を考える

表現者となったいま思う、感性を養う授業とは



イラストレーター・漫画家
カシワイ

ポイント

①本は別世界に連れて行ってくれる扉のようなもの。表紙をデザインするときは内容がより深まるようなイラストを意識している。

②頭の中にあるイメージを具体化する過程では、核となるイメージやコンセプトを事前にクライアントと打ち合わせて共通認識を明確にする。

③教師は子どもの疑問に広がりをもって返してやり、道を示すガイドとなるべき。

思い出に残る先生

イラストレーター・漫画家として活動しております、カシワイと申します。

2020年に上梓した『光と窓』（リイド社）は、小川未明や新美南吉、宮澤賢治など、私が深く影響を受けた日本文学の名作を漫画の形に再構成した短編集です。この作品が生まれたきっかけのひとつに、ある一人の先生との出会いがありました。

私が通っていた小学校では、低学年のときに国語の授業だけサブの先生がついていたのですが、その先生は詩や短歌などを題材に低学年の子にもわかりやすく教えるという方針でした。その授業のおかげで、以前から好きだった児童文学の世界への興味が増し、詩や文学全般に幅広く興味をもつようになったので、今でも忘れられない先生です。

二週に一度は親に連れられて図書館に通い、たくさん本を借りることが習慣となっていたので、昔から読書は好きな子どもでした。ただ、文章を書くのは苦手で、本を読んでも文章より映像記憶として覚えているのです。そういう点からも、自分を表現する手段として絵やイラストを自然と選んだのだと思います。

私にとって本とは、限られた自分の人生だけでは経験できないことを教えてくれ、無限の世界に連れて行ってくれる扉のようなもの。

本の表紙のイラストを制作するときに心がけているのは、表紙は本の入口と出口であるということです。読者がその本を手に取る最初のきっかけでもあり、本を読み終えたときに「そういうことだったのか」とさらにその物語の内容が深まるような絵であればいいなと思っています。

教科書などの表紙を手がける場合は、やはり勉強の道具でもあるから、硬さとか真面目さみたいなものがあまり出すぎず、勉強に対して身構えないような絵であることを念頭に描いています。

イメージを具体化する難しさ

創作のプロセスの中で楽しいと感じる点は、思った通りの線を引けているときとか、創作の過程でふと感じる瞬間です。

逆に難しいと感じる点は、何を描くかラフを起こしているときです。

お仕事を依頼されたときは、今回どういうことを表現したいのか、何を大切にしてこの本を編集しているのか、どういう層に手に取ってもらいたいのかなどを打ち合わせの際にデザイナーのかたや編集のかたとすり合わせて、なるべくブレがないようにしています。その上で絵に起こ

したときにイメージが違うといったこともあるので、その場合はラフでイメージに近づけていくという微調整はありますが、核となるコンセプトや目標といったものは事前の打ち合わせで明確にしておくよう心がけています。

ただ、クライアントさん側でもどういうものを出したいのか、どういうコンセプトで描いてほしいのか具体的に定まっておらず、真意や意図を読み取るのが難しいときがあります。そういうときは私が過去に描いたものや他の人の作品などから近いイメージや絵などでサンプルを出してもらったり、さまざまな角度や別の方向性からも探りを入れたりして、なんとか落としどころを見つけていく作業が必要になります。

自分の頭の中にあるイメージを誰もが見られるよう具現化するプロセスでは、描いてみないとわからないことがほとんどなので、とにかく数を描きます。たくさん描いた上で最もよいと思う物をクライアントさんにお送りしているので、数を描いて試行錯誤するしかないです。

インスピレーションが降りてきやすい場面は特に決まってないですが、事前の打ち合わせでどういう方向性なのかを探ったあと、一旦置いておくようにしています。そうすると何か別のことをしているとき、「こういう絵を描いたらいいのかな」とポンとアイデアが浮かび上がってくることがよくあります。

それでもひらめきが降りてこないときは別の媒体からのインプットを増やすことが効果的ですが、絵の線や形についてのスランプについては、やはり描いていくのがいちばんです。

子どもの感性を養う教育

教科書に掲載されていた文学作品の中では、安房直子さんの『きつねの窓』や工藤直子さんの『のはらうた』がとても好きでした。授業で取り上げた作品の続刊を自分で買って、先生にそれをお話しすると、それなら次はこういう作品がいいんじゃないかと提案してくださいました。そういったやりとりは今も印象に残っています。興味があることに広がりをもって返してくださったのはすごくためになりました。

子どもはまだ経験も浅く、知らないことも多いから、先生は子どもが何かに興味をもったときは「こういうものもあるよ」と別の入口を示すとか、読み広げを示唆してあげるといいのではないでしょうか。子どもの興味を引き出し、可能性を高めてやれるよう導いていけるガイドになれればいいと思います。

興味があることはその子が勝手にやるでしょうし、あとは自由に育っていくと考えます。

子どもの自由な発想を促す授業、何か新しいことを考えようとか自分で調べてみようといったたぐいの授業は私の小中学校時代にもありました。しかし中学受験をする子が多い小学校だったこともあり、みんないつも疲れていて、学校の授業は遊びだと思っているふしがありました。そういう状況で自由にやってごらん、表現してごらんといわれても、結局すべて成績に絡んでくるし、優秀なものやよいとされるものは決まっているのがすごく感じられました。そこに沿ってやれば一定の点数はもらえるし楽なので、賢い子はみんなそれにならっていました。

何か新しいことをやろうという試みをするのであれば、いっそ先生にもどうなるかわからないようなものを扱うとか、何かゴールが決まってないことをやりたかったなと今では思います。

自分なりに考える課題をみんなでやった上で、生徒どうしお互い講評しあうけれど、最終的に良い悪いといった評価はつけないとか。学校教育ではなかなか難しいと思います。

これからも表現し続けたい

子どものころ、理科の教科書の「やってみよう」というコラムが好きで、植物によって花粉の形が違うと書いてあったときは近所でタンポポの花粉を集めてきて、おもちゃの顕微鏡で観察したりしていました。

昔から生き物全般が好きで、身近にいる動物や鳥、植物や昆虫などを観察して絵に描くのが趣味でした。大人になった今やっていることは、小さいころに好きだったことの延長線上にあると感じます。

今まで自分が経験してきたことや出会った人々、読んだ本、そのすべてが今の自分を形作り、作品に変わって生まれ出ています。

好きなクリエイターさんや作家さんは数え切れないですが、今後もずっと描き続けたいと考えているので、和田誠さんや安野光雅さんのように生涯を通じて表現し続けた人には憧れます。自分もそうなれるよう、ただ真摯に努力し続けていこうと思っています。

集団生活への適応・社会的自立を目ざした支援のためのサポート・プログラム

千葉市教育センター

ポイント

①不登校の子どもたちが主体的に社会的自立や学校復帰に向かうために、「支える」「見守る」「つなげる」「学ばせる」という系統的な支援・援助を行っている。

②どの子も安心できる居場所で自分らしく生き生きと活動できるように、「体験活動」、「少人数での学習」など、多様な学びの機会を充実させている。

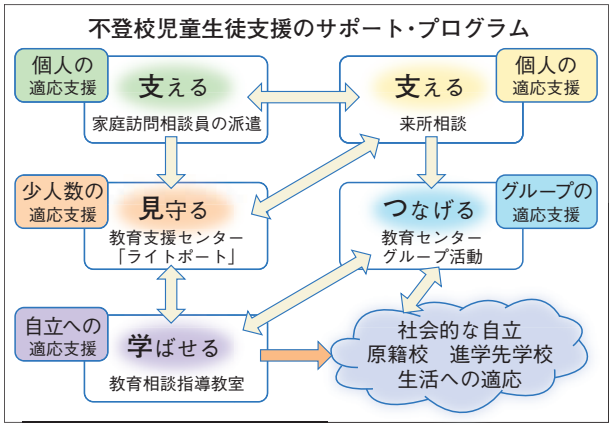
③不登校対策パッケージの取り組みにより、「誰一人取り残さない支援」を進め、子どもたち一人一人の成長を応援している。

千葉市教育センターでは、不登校の子どもたちが主体的に社会的自立や学校復帰に向かうために、一人一人の状況に応じた系統的な「サポート・プログラム」に基づき、不登校児童生徒支援を行っています。

不登校の子どもたちの多様な居場所づくりを目ざした、「誰一人取り残さない支援の様子」を紹介します。

一人一人の状況に応じた切れ目のない支援を目ざして

不登校の子どもたち一人一人の背景やニーズは多様化しており、個に応じた適切な支援や働きかけが求められている。千葉市教育センターでは、「支える（家庭訪問相談員の派遣）（来所相談）」「見守る（教育支援センター『ライトポート』）」「つなげる（グループ活動）」「学ばせる（教育相談指導教室）」という系統的な支援・援助を通して、子どもたち一人一人が「集団生活への適応や社会的に自立すること」を目ざし、サポートを進めている。子どもの実態、気持ちや思いなどを学校と保護者、教育センターの三者で相談・検討しながら、居場所の提供をしている。



【支える支援】家に引きこもりがちな子どもたちに寄り添う支援に向けて　～家庭訪問相談～

不登校の子どもたちを「支える支援」として、自宅に引きこもりがちな子どもの家庭を訪問して面談等を行う、家庭訪問相談事業を実施している。子どもたちに近い年齢の若い相談員が、毎週決められた時間に2時間程度訪問し、話をしたり、一緒にゲームで遊んだりしながら人間関係を築き、状況の改善を目ざしていく。訪問を重ねることで関係が深まり、これまで家から出ることができなかった子が公園で指導員と一緒に遊べるようになるなど、成長につながっている。

また、近年増加している自傷行為やDV等の重篤なケース、何年にもわたる長期化のケース等に対応するため、令和4年度より家庭訪問カウンセラーを配置した。保護者や学校の要望に応じて、迅速に家庭訪問相談を行い、早期のケアに努めている。さらに保護者が安心して子どもに寄り添えるように、相談員と共に家庭を訪問し、保護者へのカウンセリングも実施している。

【見守る支援】自分らしく生き生きと活動できる居場所　～教育支援センター「ライトポート」～

「見守る支援」の場として、教育支援センター「ライトポート」を各行政区に1か所ずつ、計6か所に設置している。一人一人が自分らしく生き生きと活動できる「居場所」を目ざし、教科の学習や運動、創作や体験的な活動等を行ってる。特に学習については、近隣の中学校の教員がライトポートを訪れ、週に10時間程度の支援授業を行っており、学びの機会を充実させている。

ライトポートでの栽培活動

【小学生専用教室の開設】

小学生の不登校児童の増加に対応し、令和4年度からは各ライトポートに小学生専用教室を開設した。発達段階に応じたきめ細かな支援をすることで、子どもたちは自信を取り戻し、進級した4月には学校に通えるようになったという報告も多い。目的や内容によって小中が分かれて活動できる体制を整えたことで、より安心した環境で多様な学びができるようになり、小学生のみならず中学生にとってもよい影響を与えている。

【成長につながる体験活動の充実】

ライトポートでは、校外学習、スポーツ交流会、宿泊行事、発表会と年間を通じて多くの体験活動や行事を行っている。集団での活動を通じて、人間関係や社会性を育成している。段階的に「人とのかかわり合い」が広がるように、一つのライトポート単独で実施する行事もあれば、6か所のライトポート、教育センターで行っている「グループ活動」と連携して行う行事もある。

その一つ、「ジョイントキャンプ」は豊かな自然環境の中で、人や自然とのかかわりを学ぶ、2泊3日の宿泊行事である。不登校の子どもにとって家庭から離れ、宿泊行事に参加することは高いハードルともいえるが、4年ぶりに実施した10月のキャンプには総勢50名の子どもたちが参加し、大きな挑戦をした。

ジョイントキャンプでの朝の集い

【ジョイントキャンプに参加した子どもの感想】

・いちばん思い出に残った活動は、カレー作りです。いつも一人で作っていて楽しいと思わなかったけれど、みんなで協力してカレーを作った経験は、とても楽しい思い出です。

・このキャンプに参加すること、誰かと一緒に寝ること、お風呂に入ることなど、自分の中でいろいろ「挑戦」したことがありました。楽しかったことも失敗と思ったこともあったけれど挑戦してよかったと感じました。

【学ばせる支援】学校生活への適応と社会的自立を目ざして　～教育相談指導教室～

「学ばせる支援」として、市内中学校内に「教育相談指導教室」を設置している。ライトポートやグループ活動における生活をとおして、人間関係や集団への適応力を高めてきた子どもたちが主に入級をしている。「教育相談指導教室」では、通常に近い教育課程を実施しつつ、少人数での生徒一人一人の実態に応じた指導・支援を行っている。体育祭、合唱コンクール、修学旅行等の行事に参加をすることで、学校生活への適応および社会的自立を目ざしている。また、教科担任制できめ細かな指導をすることで、生徒の意欲は向上し進路について深く考えるようになり、希望の高校へ入学する生徒も多い。教職員が一人一人に寄り添う支援をするとともに、生徒同士のふれあいを深める機会を多く作ることで、安定した学校生活を送ることができている。

授業風景

つながらない子どもを0へ　～不登校対策パッケージの6つの取り組み～

千葉市教育センターでは、多様な居場所を提供することで不登校の子どもたちを支えている。しかし、いまだ「支援の輪に入れていない」「どこにもつながっていない」子どもたちが多くいることは大きな課題である。そこで、令和4年度から6年度にかけて、「不登校対策パッケージ」を策定し、更なる支援の拡充に向け、6つの取り組みを進めている。

令和5年度からの新しい取り組みとして、市内小中学校各2校に、校内教育支援センターで指導を行う専任の教員（ステップルームティーチャー）を配置した。ステップルームに通う子どもたちは、個々の状況に応じた支援を継続的に受けられるようになり、その安心感から、「学校内に居場所ができた」という声が聞かれるなど、大きな成果が見られている。

今後も「誰一人取り残さない支援」を目ざし、子どもたちの一人一人の成長を応援していきたい。

不登校対策パッケージ

- ライトポート機能拡充
- スクールカウンセラーの機能強化
- 教育センターの機能拡充
- ステップルームティーチャーによる登校支援【別室登校】
- 教職員への啓発と研修の充実
- フリースクール等との連携強化

学校が生徒の居場所となることを目ざして

横浜市立鴨居中学校
校長　長島　和広

ポイント

①教員が「別室から教室に戻す」「みんなと一緒」にこだわらない教育観への転換を図る。
②活用できる外部リソースを探し、柔軟に導入する。
③生徒の自立を目ざし、状況に合わせた対応を考え、生徒・保護者・教員間で共有する。

学校に複数の居場所をつくる

文部科学省令和4年度「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」によると、全国に不登校生徒（小・中学校）は29万9048人おり、在籍児童・生徒に占める不登校の割合は3.2％に及ぶということである。中でも、公立中学校の生徒に限ると18万5810人、在籍に占める割合は6.3％となっている。各学級に2、3人いる計算になる。

本校でも同じくらいの割合で不登校、不登校傾向にある生徒がいる。その不登校にいたった原因を探っても一人ひとり異なり、思い悩んでいる気持ちを表現することができない生徒もおり、対応に苦慮したまま年月が経過してしまう傾向がある。また、保健室登校や別室登校といった形をとっても、支援する人がいないことで十分機能させることができていないこともある。

本校では、平成30年ごろから特別支援教室として活用されていた保健相談室をベースに不登校支援を本格的に開始した。同時期に経済産業省「未来の教室」実証事業に参画し、不登校支援でのデジタルドリル「デキタス」（城南進学研究社）の活用を進め、学習面での不安解消を図った。そして、令和3年度からは横浜市教育委員会による「校内ハートフル事業」に応募することで、支援員（週29時間）が配置され、生徒たちが特別支援教室にいつ来ても誰かがいる体制を作ることができた。特別支援教室を「和みルーム」と名付け、生徒指導専任教諭（生徒指導主事）と支援員の2名が中心となって、オンライン学活や学習支援を企画運営している。

「和みルーム」を利用するには、本人、保護者が同意の上、担任を通じて特別支援校内委員会に利用申請し、承認された生徒が利用できるようにしている。「和みルーム」への登校は、生徒それぞれの体調に合わせて登下校している。朝登校して午前中で帰る生徒や昼前に登校して午後早くに帰る生徒、昼前に登校して部活まで参加する

和みルーム

生徒とそれぞれである。個人の選択を大切にしている。

学校だけで抱えない

学習については、教室で授業を受けることもできるし、オンラインで授業に参加することもできる。また、技能教科だけ参加する、「デキタス」で自信のない教科の学び直しをすることもできるようにし、支援員と相談しながら自分の学びを選択するようにしている。それらの記録は本人が日誌に記録すると共に支援員が学習支援アプリ「スタディプラス」（Studyplus 社）に記録し、担任とも日々の生活について共有をし、保護者に報告をしている。これらのアプリについては「未来の教室」事業終了後も、それぞれの企業と共同研究を進めることで利用することができている。

また、「なごミーティング」や「なごマリタイム」と名付けたイベントを企画し、生徒たちのモチベーションの維持を図っている。「なごミーティング」では、さまざまな企業のかたとお話やカードゲームをする機会をつくり、社会人の人の考え方やものの見方を感じさせ、自立に向けた気持ちを育てている。「なごマリタイム」では、横浜F・マリノスの協力を得て、サッカーやチアリーディングを通じた軽運動や身体ほぐしをしている。「なごミーティング」でつながったサイボウズ社のかたと生徒たちが話し合い、本社会社訪問も実現した。

今年度は、市教委が進める起業家育成事業「はまっ子未来カンパニープロジェクト」に応募し、「なごみ菜場」を立ち上げ野菜の栽培販売にチャレンジしている。もちろんこれらの参加についても本人の意思で選択させている。

このように学校だけでなく、企業のCSR事業に応募したり、学校地域コーディネーターを通じて大学生のピアボランティアを募集したり、教育委員会の事業に応募したりすることで、学校だけで終わらない外部リソースを活用しながら持続可能な取組を増やしてきた。

なごみ菜場～サツマイモ収穫～

だれもが安心して学ぶ環境をつくるために

このような取組を支援員だけで進めることは難しい。実際には、生徒指導専任教諭を中心に職員間や外部との調整を進めている。学びの面では、全教員の担当時間を時間割に入れ、「和みルーム」で生徒たちと関わる時間を作るようにしている。この時間に授業をやるということではなく、生徒それぞれの学びに寄り添い、教員が支援するという形を取っている。自ずと教科の話をよく生徒たちとするようになり、学年担当や担任以外の教員とのつながりを作ることができている。全員が関わるようにした背景には、保健室や特別支援教室への登校は一時的なもので教室にいるべきだという考えをもち、特別な配慮や支援は「不平等」「わがまま」「努力が足りない」と理解を示さない教員も少なからずいたことから、現状を知るという意味もあり、このような形にしている。保護者に対しても担任が保護者の困り感を共有し、生徒の自立に向けた方向性を確認し、同じ歩調で支援を続けることを大切にしている。

学習支援の様子

校内で取組が定着することにより、教員にとっては不登校支援の手立てができたこと、生徒にとっては自分の選択で生活リズムを作り、心身が安定するといった、好循環が生まれている。おかげで、学校との関係が切れて支援が行き届かない生徒はほとんどいない状況までたどり着いている。

不登校特例校やフリースクールなどさまざまな不登校支援のチャンネルが注目されているが、だれもが安心して登校できる居場所として本校が選ばれるよう、これからも進化をしていきたい。

文字を手で書くことは、このような身体的表現であり、技能の教育の基礎に位置づけられます。ことばの表現力を支える技能として、それぞれ個人が積み重ねて培っていく表現力なのです。「タイムパフォーマンス」ということばが席巻し、何事にも効率化が求められる現代ですが、こればかりは他者にも頼ることができない、トレーニングによって身につけなければならない能力なのです。

デジタル社会の広がりは、手書き文字文化を支えていく

ここまで教育における手書きの価値や位置づけを確認してきましたが、ここからは「文化」としての側面も考えてみましょう。

つい最近、学生と話していて驚いたことがあります。ある学生が「門」の略字「冂」を使わないというので、そのクラス全員に聞いてみたところ、ほとんどの学生が使ったことがないというのです。親が使っているのを見て読めるけれども、自分では使ったことがないとのこと。試みに「転員室」や「日旺日」などの表記も聞いてみましたが、やはり見たことがない学生が大半でした。

ほとんど使われなくなってきた「略字」

これらの文字は、手書きによって生まれた略字です。パソコンの普及によって文字を省略すること自体がなくなり、またパソコンでは表示できない字体であるため、次第に使われなくなりました。パソコンが普及しなければ、これらの略字が一般的な字体になっていったのだと思われます。このように、これまでのデジタル社会は手書き文字文化を制約し、妨げるものでもありました。しかし、これからの時代には、手書き文字の表現力にデジタルの能力が追いつくことになるでしょう。デジタル社会は、手書き文字文化を狭めるものではなく、むしろ共存して広げるものへと発展すると考えられます。

私たちは、歴史を背負って文字を書いている

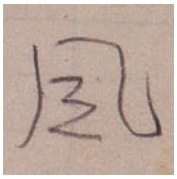
以上のように、手書き文字文化は決して過去の遺物ではなく、未来への可能性を秘めた「いまを生きる文化」です。

ただし、文字は歴史とともに変化してきたということも忘れてはなりません。ここに、先人たちが書いてきた「風」という文字を並べてみました。私たちの文字文化は、先人たちが書き継いで、受け継がれてきたことばのかたちの表現です。文字を手で書くことによって、私たちはこれらの歴史の最後に位置することになります。文字をよりよく表現しようとすることは、歴史を背負って文字を書くことであり、文化を新たに創り出す役割を担うことなのです。文字を手で書くことは最も身近な、歴史に参加する行為と言えます。ぜひ、その歴史の重みを感じてほしいと思っています。

王羲之「蘭亭序」

空海「風信帖」

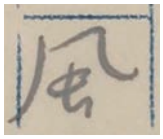
良寛「天上大風」


宮沢賢治「雨ニモ負ケズ手帖」(注4)

歴史とともに文字がある

欧陽詢「九成宮醴泉銘」

小野道風「屏風土代」


芥川龍之介
「奉教人の死（原稿）」(注5)

（注1）原文は、Mueller, P.M. & Oppenheimer, D.M.（2014）："The Pen Is Mightier Than the Keyboard：Advantages of Longhand Over Laptop Note Taking", Psychological Science, 25（6）
（注2）京都大学「漢字の手書きは文章力の発達に独自の貢献をする―読み書き発達の二重経路モデルの提唱―」（https://www.kyoto-u.ac.jp/ja/research-news/2023-04-27-3）。
（注3）大塚貞男・村井俊哉「日本の中高生の読み書きスキルへの正確な手書き習得による独自の貢献」原文は、Sadao Otsuka, Toshiya Murai（2023）. "The unique contribution of handwriting accuracy to literacy skills in Japanese adolescents", Reading and Writing, Published：24 April 2023.
（注4）画像提供　林風舎
（注5）国立国会図書館デジタルコレクションより

きょういく見聞録

手書き文字文化の現在、そして未来のために

筆者は、書写書道教育の歴史研究を中心としつつ、現代における文字を手で書くことの意義について考察を進めています。文字を手で書くことは、デジタル入力よりも記憶学習の効果が高いとされており、トレーニングによって身につけられる技能です。文化的な側面から見ても、先人たちが書き継いできたことばのかたちの表現に加わり、その歴史に参加する行為であるといえます。

鎌倉女子大学短期大学部　准教授　杉山　勇人

文字を手で書くことの現在

文化庁が実施した「国語に関する世論調査」（平成26年度）には、「文字を手書きする習慣は、これからの時代においても大切にすべきであるか」という設問があり、これに91.5％の人が「大切にすべきであると思う」と回答しました。また、年賀状や挨拶状などについて、「手書きされたものや手書きが一言加えられたものがよい」と87.6％の人が回答しています。手書き文字の習慣や価値は、多くの人々に支持されてきたといえるでしょう。

しかし、コロナ禍以降の社会にはデジタル化の波が押し寄せ、文字を手書きする機会は急速に減っていると思われます。文字を手で書くことの教育や文化もこのまま縮小し、失われてしまうのでしょうか？

手書き学習の効果は見直されつつある

実は、文字を手で書くことの学習効果は、さまざまな方面から見直されつつあります。むしろデジタル化が進んでいると思われる海外で、その研究は進んでいます。有名なものとして、ミューラー＆オッペンハイマーの「ペンはキーボードより強し」(注1)という挑発的なタイトルの研究があります。彼らは、ノートパソコンでメモしながら視聴する人と、紙にペンでメモしながら視聴する人に分けて、被験者に映像教材を学習させました。その後、学習内容をテストすると、紙にペンでメモをした人たちの成績が有意に高かったのです。

また最近、京都大学の研究グループは、漢字書字力と文章作成能力との関連性について明らかにしました。漢字の意味を理解すること自体よりも、漢字の手書きに習熟することの方が、文章作成能力に影響を与えるというのです。この研究は、「手書きに基づく読み書き教育を今後も続けていくことが、これからの世代の高度な言語能力の発達のために有益であること」を示唆しています(注3)。

漢字の手書きは文章力の発達に独自の貢献をする(注2)

このように、特に記憶に関わる側面で、デジタル入力よりも手書きすることに学習効果があり、ことばを表現する力にも影響があることが確かめられています。教育現場では、その効果も意識しつつ、場合に応じたデジタルデバイスの使用を心がける必要があるでしょう。

文字を手で書くことには「トレーニング」が必要である

当たり前のことかもしれませんが、文字を手で書くことの教育は「技能の教育」です。学校教育において「知識及び技能」はセットで語られていますが、「知識」と「技能」は本来分けて考えるべきでしょう。

従来の「知識」は個人が備えるものでした。ところが、デジタル時代における知識は、誰もがアクセスすることができ、いつでも取り出せる「データ」となりつつあります。もちろん知識を蓄えることは今でも大切ですが、たくさん覚えることよりも、データとしての知識を取り出し、いかに使うことができるかを求められる時代に変わりはじめています。一方で「技能」は、個人に備わるものであり、他者と共有できない能力です。スポーツに代表されるように、繰り返しトレーニングを重ねて体で覚えていくことです。このため、技能が身についているかどうかは、「実際にやってみる」ことで確かめるしかないのです。

●小太郎神社の由来を学ぶ

「学校遠足により明らかになった庄川に関する事実」

- 庄川地区は江戸時代に拓かれたが、常に用水不足で悩む
- 状況を見かねた近藤小太郎は、家産を傾けてまで水路を開くことに努めた
- 小太郎は志半ばで亡くなったが、次当主の夢枕に大蛇として現れ、それに沿って治水工事を開始
- 大蛇伝説をもつ「小太郎神社」が庄川地区にある
- 庄川地区の広大な水田は、戦前・戦後の圃場整備により実現
- 市は、新ブランド米として栽培されたお米を「小学校米」として商品化、学区の小学校米は庄川地区で栽培

新潟県見附（みつけ）市

見附市立見附小学校　教諭　漆原（うるしはら）　史剛（ふみたか）

地域教材を見直し、子どもが社会に貢献する意欲を育む教育活動

見附小学校区は、公共施設、駅、商店街がある見附市の中心部です。森林公園、広大な水田も広がるなど、教育活動の核となる魅力ある教材にあふれています。5年生担任は、これまでに、地域教材の価値を蓄積しながら実践を積み上げてきました。

庄川（しょうがわ）地区の価値を再発見

以前は、全校異学年のふるさと遠足を実施していましたが、さまざまな制約の中で、教科学習に位置付けた学年実施に舵を切りました。5年生は庄川地区を「米づくりのさかんな地域」単元に関わらせることにしました。これまでの諸活動により、上記表にまとめた事実が明らかになります。

今年度は、これらをトピック的に取り上げるのではなく、庄川地区を核とした単元に再構成し、「米づくりのさかんな地域」という見方だけでなく、「先人が切り開いてきた」「見附市内でも規模の大きな土地改良を行った」「これからの市の施策の最前線を担う」場という価値の再発見をねらいました。

活動を子どもの思いや願いにつなげる

地域の水田で田植えを経験し、「自分たちでもお米を育てたい」との願いから、芽出しからバケツ稲も育てました。さらに、庄川地区の歴史を学んだ上で遠足に出かけ、見渡す限りの広大な水田、貯水池やポンプに圧倒されていました。

稲刈りと脱穀では、手作業の大変さに気付き、落ちているお米も拾い集め、「手でも、もみ殻取れたよ」と収穫の喜びを味わいました。一方、バケツ稲は出穂したものの、JAのかたから「水がお湯のようになり、生きていくことに精一杯で、残念ながら実ってない」と告げられました。「酷暑を乗り切って収穫している農家さんは、やっぱりすごい」「給食を残している現状について、考え直

●地域から継続的に学ぶ

したい」など、食料生産の難しさとともに、従事するかたの苦労や今の食生活へと視野を広げました。

これからの地域社会の担い手を育む

庄川地区の圃場（ほじょう）整備の発案者であり、学区の「小学校米」生産者と担当職員を迎えた学習では、「市が進めている『地消地産』を広めるために、小学校米を売る手助けをしたい」「自分たちが学び・考えたことを、発信したい」と子どもたちは活動を生み出し、学びをまとめています。ポスター、絵本、ご飯のお供まとめ本、劇、ドキュメンタリー動画、わら細工等々、子どもたちの想像力の幅広さと創造力の高さに驚いています。これも、庄川地区という地域教材が魅力的であり学びを広げ深めたからだと感じています。

学校の役割は、仲間と力を合わせ、必要な手を借り、できることに全力で挑戦する子どもたちを育てることです。地域教材を絶えず見直し、社会に貢献する意欲を育むことができる教育活動を、これからも展開していきます。

●小学校米のよさを発信

全国各地のさまざまな取組を紹介します。

東京　探求心を引き出す校長講話とは？

墨田区立第四吾嬬小学校　校長　清水　雅也

新たな発見をする、知的好奇心がくすぐられる。こんな楽しいことはない。月曜日の朝からこのような気分を味わえたなら、一週間の学習はスムースにスタートできるだろう。校長に与えられた唯一の授業である「朝会講話」を探求心を引き出すために活かせないかと考えた私は、いつのころからか「？を探す旅人」となった。

先日は、日光移動教室への車窓から発見した「トラス橋（河川に架かる鉄橋）」について、『三角形の不思議』と題し「問題提起→検証→結論→考察」の構成で話した。牛乳パックで作った「けた（一枚板・四角柱・三角柱）」に某キャラクターのフィギュアを乗せた強度比較実験の写真も提示した。毎週の講話で私が心がけていることは、

①児童朝会は、話を集中して聞く環境を作るために、各教室へ「リモート配信」する。
②キーワードや図・写真等を示し、視覚優位の児童の理解を支援する。
③児童の学習用タブレットに資料を配布し、個々でふりかえりができるようにする。
④講話の要点を「毎朝のお手紙」として全学級に配布し、内容の定着を図る。
⑤話題は、地域の歴史、自然科学、時事ネタ（SDGs、食育、防災など）と幅広い分野から選定するとともに、「知の連鎖」を生み出すために、関連性・継続性のあるものとする（詳細はHPを参照）。

毎週月曜日、校長からの「知の挑戦状」に果敢に挑む児童たち。「しってるよ！　わかったよ！」という歓喜の声、その誇らしげな表情は、知ること・発見することの喜びに満ちあふれている、輝いている。「知の満足感」に満たされたキラキラ笑顔の児童がいっぱいな学校ほど、ステキな空間はないと思うが、皆さんはいかがお考えになるだろう？

岩手　ふるさとの未来を切り拓く児童を育てる ～探究活動とICT活用を生かして～

紫波町立西の杜小学校　校長　佐藤　謙司

小中一貫教育

本校は、小中一貫校紫波西学園（施設隣接型）として、「ふるさと学習」の探究活動を研究の柱にすえ、「教師のファシリテーション力」と「ＩＣＴ活用」を手立てとし、対話的で協働的な学びの充実を目ざしています。これは紫波町小中一貫教育で目ざす資質・能力（他者との関わり・自分自身の生き方・すべての基礎基本）の向上にもつながるものです。

探究型学習の実践

小３のふるさと学習では、学年テーマ「ふるさとのよさを追究しよう」、題材名を「ぼくもわたしも紫波町はかせ　町の魅力　広め隊」とし、町内５か所の魅力の発見探索と情報の整理分析、発表会や大型ポスターづくりに取り組み、魅力を発信しました。常にタブレットを活用し意欲的に話し合う姿も見られました。このような探究のスパイラルに則った学習は、小１から中３まで系統的・計画的に行われています。

今秋の公開では、参会者から「ゴールや目的意識がしっかりあったので、子どもたちがそれに向かって走り出す授業だった」と感想をいただきました。自走する学びは目ざしている姿に合致するものでした。

リーディングDXスクール事業

本校では、リーディングDXスクール事業に参画し、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を図るべく、ふるさと学習や他教科においてタブレット活用の幅を広げてきました。ロイロノートを「教わる」「考える」「やってみる」「対話する」の４つのシーンに分け、多様な活用方法を日常的に実践しています。

今後の展望

学校再編によって開校して３年。タブレット端末を活用して２年となりますが、このような実践を積み重ね、意欲的で対話的で、ふるさとに愛着をもち未来を切り拓く児童の育成に努めていきます。

岡山　おかやま　まなびとサーチ ～小学生、中学生のための学びのコンテンツサイト～

岡山県教育庁生涯学習課　社会教育主事　石川　雄大

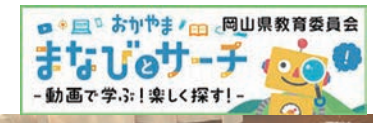
岡山県教育委員会では、子ども一人ひとりに応じた学習活動や学習課題に取り組む機会を提供するため、学習用動画等を多数掲載するサイト「おかやま　まなびとサーチ」を運用しています。子どもたちは、GIGA スクール構想によって整備された１人１台端末等を活用して本サイトにアクセスし、自らの興味や関心に応じて「いつでも」「どこでも」学びたいときに主体的に学ぶことができます。

これからの学校には、社会（地域）と連携・協働した教育活動を充実させることが求められていますが、本サイトのコンテンツの特徴は、岡山県の「人」「もの」「こと」など、地域資源を活用し、その多くが、視聴後に現地へ赴き学びを深められるように作成していることです。

倉敷市立第二福田小学校では、小学校第６学年・理科「土地のつくりと変化」の単元において、本サイトの「岡山の大地のロマンを追い求めてみよう」という動画を視聴することを授業に取り入れました。この動画では、水のはたらきによって、自分たちの住む土地の海岸線の位置が大きく変化していることが確認できます。

地層の観察が困難な地域ではこの動画を視聴することで、地下には、水のはたらきによってできた地層が広がっているということをイメージしやすくなり、教科書の中にあった学びが、一気に自分たちの足元と結びつきます。子どもたちからは、「動画があるとわかりやすかった」「実際に倉敷市立自然史博物館に行ってみたい」などの声が聞かれ、学びを深めることに役立っています。

サイト内には、臨場感あふれる VR を活用した動画やさまざまなお仕事を取り上げた紹介動画などもあり、今後も、子どもたちの多様な興味関心に応えられるよう、コンテンツを充実していきたいと考えています。



神奈川　相模原市立青少年相談センターの取組

相模原市立青少年相談センター所長　加藤　政義

文部科学省より不登校対策として発表された COCOLO プランの中に、教育支援センターの機能強化があります。当センターは教育支援センター的機能として不登校児童生徒が通う相談指導教室を運営しています。また、COCOLO プラン以前より、保護者の相談場所としての相談室を設置するとともに、保護者へ情報提供を行う「不登校を考えるつどい」や不登校児童生徒がさまざまな体験に挑戦する「チャレンジ教室」を企画運営してきました。

当センターの取組の一つに、メタバース空間を活用した「オンライン版チャレンジ教室」があります。「チャレンジ教室」はものづくり、ゲーム、スポーツなどさまざまな体験をするイベントなのですが、「オンライン版」では民間企業の協力を得てつくられたメタバース空間にアバターで参加し、クロスワードやクイズなどにチャレンジするというものです。昨年度は１回、本年度は２回と、まだまだ実施回数は少なくスタートラインに立ったばかりで試行錯誤を重ねる必要がありますが、このイベントで重要なことは、なかなか社会とつながりをもてなかった子どもたちが、オンラインの先にあるリアルな体験や対面での会話につながることを目標としているところです。実際に、今までどこにもつながりをもてなかった子どもが「オンライン版チャレンジ教室」への参加をきっかけに、当センター相談室でカウンセラーと会えるようになった等の成果があります。また、参加者の自宅にものづくりキットを郵送し、メタバース空間で手順を聞きながら作品を制作するなど、仮想空間と現実をつなげる試みも行っています。

メタバースで留意すべき点は、活用そのものが目的になってしまうのではなく、その先にある「子どもたちが出会いや体験を通して社会とつながる姿」を描くことだと考えています。

地球となかよし ゼミナール

【連載第１回】（全３回）

「話す」は生きる力
～子どもたちの未来を変えるプログラム～

一般社団法人
アルバ・エデュ代表理事　竹内明日香

はじめまして、一般社団法人アルバ・エデュの竹内明日香です。公教育における「話す力」の向上を目ざす私たちのプログラムについて、この連載を通じて紹介します。今回は「話す力」によって子どもたちと先生がたに起きた変化や、その力がこれからの子どもたちにとってなぜ重要かについてお伝えします。

活動を始めた経緯

私は金融機関勤務を経て起業し、その間に国際ビジネスの現場で多くの日本人が、プレゼンや交渉に苦戦する場面を目の当たりにしてきました。その中で、語学力の問題ではなく、自分の意見をもち自信をもって発話し、聞き手の反応を見て言葉を紡ぐといった「話す力」の欠如に問題があると気づきました。子どものうちからこれらの能力を高められないか。そう考え、９年前に子どもたち向けのプレゼンワークショップを開始、その後、学校での授業展開にも取り組み、現在は教員研修などのプログラムを全国複数の自治体に提供しています。

子どもたちに起きた変化

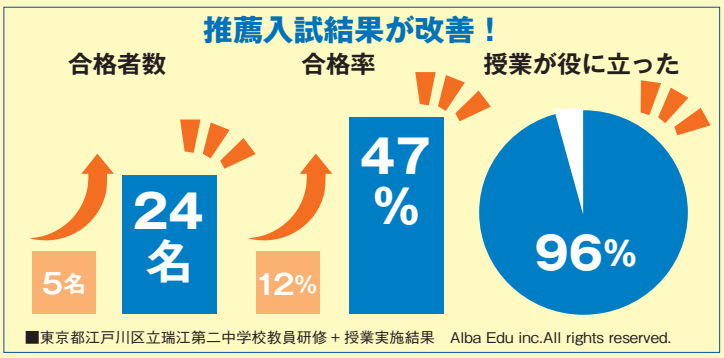
昨年度、９つの自治体の小中学校でプログラムの効果を検証したところ、子どもたちの「人前で話す楽しさ」への認識が高まり、「自己効力感」が向上、学級内の心理的安全性も高まったとの結果を得ました。なかには、全国学力調査の成績が前年比で10－20％向上したり、推薦入試の合格者数が約５倍、26人中25人が「このプログラムのおかげ」と回答したりするなど、うれしい効果が確認できた学校もあります（下図ご参照）。

「話す」には、能動的かつ即時的な思考が要求されます。ＭＲＩ装置を用いて脳活動を調べるｆＭＲＩ（磁気共鳴機能画像法）による複数の研究によれば、話す際には、内容を考え、適切な表現を選び、正しく発話する必要があり、これにより脳の複数の部位が活性化すること、さらに、相手の反応を見ながら発話を調整することで、情動も鍛えられるということがわかっています。

主体的に社会に参画する力

日本の子どもたちがこれから生きていく世界には、環境問題、国際政治・経済情勢など、多くの課題が待ち受けており、そのような世界においては、自分の頭で主体的に考えて社会に働きかけることこそが生きる力になります。ＯＥＣＤのラーニング・コンパス２０３０は、「社会参画を通じて影響を与える責任感」を重視しており、日本の「主体的・対話的」を重視する学習指導要領もこの流れに沿っています。私たちのプログラムも、子どもが自ら課題に働きかけることの重要性を認識したうえで、自信をもって自らの意見を述べ、社会に積極的に参画する意識を醸成することを目標においています。

しかしながら、教育現場では先生がたから「子どもたちは隣の子とおしゃべりはできても、対話や人前で話すのが得意ではない」、「考える力が育まれていないのがその理由なのでは」、とのお声を耳にします。



次回の記事では、子どもたちの話す力、生きる力を育むことにどのように私たちのプログラムが貢献しているのか、詳しくご紹介します。ぜひご期待ください。

竹内明日香（Aska Takeuchi）
旧日本興業銀行にて国際営業等に従事後独立。日系企業の海外向け情報発信やプレゼン等を支援する傍ら、２０１４年に（一社）アルバ・エデュを設立。自治体や学校でアドバイザーを務める。著書に『すべての子どもに「話す力」を』（英治出版）、『思いを伝える「話す力」』（Ｚ会）。東京大学法学部卒業。

Front Runner

【連載第２回】（全３回）

私たちの未来のために！ 多彩な SDGs アクション ～こどもエコクラブ～

公益財団法人　日本環境協会
教育事業部
東（あずま）　尚子（しょうこ）

全国各地の子どもたちが、自身の興味関心にそった環境保全活動を自主的に行う「こどもエコクラブ」。子どもたちは継続的に川の生き物調査をしたり、町のクリーン活動を行ったりなど、身近な地域の環境に関する課題を自ら見つけて、保全や改善に向けて行動しています。SDGs の重要性が叫ばれる前から SDGs アクションに取り組んでいたと言えます。

定期的に町のごみ拾いをしているクラブは、自分たちが拾い続けても地域の人がごみのポイ捨てをやめようと思わない限り抜本的な解決にならないと考え、地域の小学生によるポイ捨て禁止のポスター作りを企画しました。地元の教育委員会や学校に説明しに回って協力を仰ぎ、今では町のエコポスターコンクールとして実施されるようになりました。審査会や表彰式の開催に加え、商店街への掲示依頼もクラブのメンバーたちで行っており、「SDGs11．住み続けられるまちづくりを」「SDGs12．つくる責任つかう責任」につながるアクションとなっています。

週１回継続的に地域の川の魚や水生生物を採取しているクラブは、特定外来生物を捕まえて畑の肥料に加工したり、自分たちで調理して食べたりしています。命を無駄にしないように防除して、在来種の保全につなげています。また、川にいる在来種・絶滅危惧種についてたくさんの人に知ってもらいたいと、採取した生き物の写真にメンバーたちが描いたイラストを添えたオリジナルの図鑑を制作し、地域のかたに配っています。この図鑑は自治体のウェブサイトにも掲載され、地域の「SDGs15．陸の豊かさも守ろう」の達成にも一役買っています。

このように、地域に根付いた活動を展開している子どもたちのパワーがだんだんと認知されるようになり、最近では「SDGs の活動の一環としてこどもエコクラブを応援したい！」「子どもたちと一緒に活動したい！」という企業・団体から支援や協働のご相談をいただくようになりました。

一例として、ケガや事故・自然災害等から人々の生活を守る「こくみん共済 coop〈全労災〉」様との連携プログラムをご紹介します。近年これまでにないような豪雨など、異常な気象が原因で自然災害が発生しており、地球温暖化の影響で起こる気候変動の一つではないかと言われています。そこで、電気・水道・ガスなどのライフラインが使えないときに役立つ方法を体験したり、日々のエネルギーの使い方を見直したりするプログラムを開発。３年前よりこどもエコクラブの全国一斉活動として、防災アクションに取り組んでいます。子どもたちが活動することで周囲の大人も改めて日頃の備えや地域の防災体制をチェックするなど、「SDGs11．住み続けられるまちづくりを」に貢献する活動となっています。

SDGs の取組として何をしようか、または企業団体と連携して活動できないかと思案されているかた、こどもエコクラブと一緒に活動してみませんか。目標達成のための大きな戦力となる子どもたちがたくさんいます。いつでもご相談ください！

Educo No.63 2024年2月13日発行

大峯千日回峰行で己の限界に肉薄、山から持ち帰った気づきの花

ほ・っ・と・な・出・会・い

福聚山 慈眼寺 住職 塩沼 亮潤さん

命をかけた過酷な修行

大峯千日回峰行をご存じでしょうか。標高差1300メートル余りの険しい山道を一日48キロ、千日間歩き続ける過酷な修行です。小学生の頃、千日回峰行に挑む酒井雄哉大阿闍梨の姿をテレビ番組で拝見し、「自分もやりたい」と思ったのがこの道に飛び込んだきっかけです。

一年のうち山を歩ける期間は5月から9月の四か月に限られますので、9年がかりで31歳の時に満行しました。

行の間は大怪我をしても高熱が出ても、医者にかかることはできません。途中断念する場合は自決用の短刀で腹を切らなければならないと言われています。足が腫れ上がったり膝が曲がらなくなったり、失神するほどの歯痛に襲われた時も、苦痛をこらえてやり過ごしました。

当時は一日の始まりに目覚めた瞬間、体調は良いか悪いかではなく、常に悪いか最悪でした。山中で熊に追いかけられたり、暴風雨で崖から吹き飛ばされそうになったり、命の危険を感じたことも多々ありました。それでも、「今日は行に行きたくない」と思う日は一日もありませんでした。

母の姿を思い返して

苦しい修行をやり遂げる底力となったものは何かとよく聞かれるのですが、貧しい中でも必死に育ててくれた母親の存在は大きいです。

中学生の時に両親が離婚して、その後は母と祖母の三人で暮らしていました。母はもともと体が弱く、本当は横になりたいだろう時も笑顔でがんばっていました。つらい時はふと母の姿が蘇ってきて、負けてられないと思うんですよね。母と祖母が神仏に手を合わせる姿を見て育ったからか、私も神仏の世界に自然になじんでいったように思います。

厳しい修行は覚悟の上で飛び込んだ世界なので、愚痴は言うまい、音は上げるまいと思っていました。お坊さんになって修行するために生まれてきたのだということは、自分で不思議と納得できました。

修行の意義

千日間体を動かして山を駆け回っても、目に見えない心の部分がリンクされていなければ修行にはなりません。山中を駆け巡っている時はいつも、己の心の悪い部分や醜い部分を見つめて、なぜ改善できないのかと反省していました。

千日回峰行を満行した翌年には、9日間の断食・断水・不眠・不臥の中、20万編の御真言を唱え続ける「四無行」を満行しました。行を経験した後は些細なことにこだわらなくなり、自分の感情をコントロールできるようになったと思います。忍耐力がついて、感謝の心でポジティブに生きていけるようになりました。

肉体的にも精神的にもギリギリの状態に自分を追いこむことで、その場所にしか咲いていない悟りの花のようなものを見て、何らかの気づきを持ち帰ってくることに千日回峰行の意義があるのではないかと思います。その花の姿形を皆さまにお伝えさせていただくことに、行者やお坊さんの役目があるような気がいたします。

行とは決して苦しむためにするのではなく、苦しみの中から喜びを得るためにやるもの。それはちょうど人生も同じなのではないでしょうか。

教師は人間力を磨くべき

中学生の時、全校集会で生徒たちが騒いでいて、怖い先生がどんなに青筋立てて「静かにしなさい！」と怒鳴っても全く収まらないのに、一人の老教師が前に立っただけですぐ静かになったことがありました。この人間力はすごいなあと感嘆したものです。

先生からにじみ出る人格とか、優しさ・思いやりといったものは、子どもの方が見る目があってごまかせないです。

学校の先生は、まず己の生き方を律して、生徒から尊敬してもらえるような存在にならないといけません。その努力を怠って、どうしたら子どもをまっすぐ育てられるか、こういうアプローチの仕方はどうかなんて考えても、小手先だとすぐ見抜かれます。

教育とは先生のやっていることを生徒に真似してもらうことに他なりません。先生がたは礼儀礼節を守り、約束や時間を守るといった、人として基本的な部分を正していくこと。歩き方や座り方、話し方、ご飯の食べ方、そういうところからも人格はにじみ出てきます。生徒から一挙手一投足を見られているという自覚をもって、先生がたにはがんばってほしいですね。

塩沼 亮潤（しおぬま りょうじゅん）
1968年仙台市生まれ。1987年、奈良県吉野山金峯山寺で出家得度、修行と研鑽の生活に入る。1999年に1300年の歴史上二人めとなる大峯千日回峰行、2000年に四無行、2006年に八千枚大護摩供を満行。大阿闍梨の称号を得て、2003年に仙台市秋保に慈眼寺を開山。2021年12月に「塩沼亮潤 大阿闍梨基金～ともに寄り添うプラットフォーム～」を創設。著書に『人生生涯小僧のこころ』（致知出版）他多数。

Educo Salon

前号について寄せられたご感想です。

- 「草枕」脱線雑談（全3回）が読みごたえがあり、かつ新しい知識にふれさせてくれて、とても楽しかったです。（千葉県 H.M）
- 「こどもエコクラブ」の活動がすばらしいと思いました。特に活動レポートに対して専門家がメッセージやアドバイスを返している点は感心しました。活動を学びにするためには、こうしたフィードバックが大切です。学校教育に生かしたい点です。（愛知県 T.S）
- 「ほっとな出会い」に関連して。こども食堂で退職教員等を活用して、学習もできないかと考えているところです。私は1年前から「相談まなび塾」を設置して、悩める親子の学びの場を提供しています。（宮城県 Y.A）

学びのチカラで　人と社会を　未来へつなぐ

教育出版は、無限の可能性を秘めた「学びのチカラ」を教科書という形で世に送り出し、子どもたちの成長に貢献してきました。

これからは学びの「場と機会」を、家庭へ、地域へさらに社会へと広げていきます。 学びのチカラで「自ら問い、考え続け、行動し、社会を創っていく人」の成長を支えながら未来へとつないでいく。 そのような次代の教育をリードする企業でありたいと考えます。

教育出版

教育出版は持続可能な開発目標（SDGs）を支援しています

発行所　教育出版株式会社　発行者　伊東千尋
〒135-0063 東京都江東区有明3-4-10 TFTビル西館
内容について　Tel.03-5579-6554　Fax.03-5579-6574
配送について　Tel.03-5579-6546　Fax.03-5579-6548